

# どれみなのはなし

## そのじゅう



もくじ

まえがき

きれなのどっち？	3
ちっちゃなかくれんぼ	17
あとがき	35

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

薄いながらも続けてまいりましたどれみパロディ小断本も、ついに10冊を数えるまでになりました。

え、一部の方。言いたいことはわかります。はい。でもこれが10冊目なんです。そういうことにしててください。

さて、今回なぜか二連続誕生日断ですが、恥ずかしい断なのはあいかわらずです。苦手な方は、このまま本を閉じて下さいね。

準備はよろしいですか？

それでは『どれみなはなし』そのじゅう。しばらくの間お付き合いくださいませ。

イラストレーション……久遠一海

酒処 金井亭亭主 猫好敬白

## きれなのどっち？

トントントン

いやあ、いつ聞いてもいいなあ

チャツチャツチャツ

そうそう、このリズムがきれいなんだよねえ

ジュジュジュウ

うああはひやは　ん、いい匂い！

「あんなあ、どれみちゃん？」

あ、え？

「手伝わんのやったら、後ろでコンコンせんといてや」

ナフキンで髪しばったあいちゃんがむっ、て

顔で振り向いた。

あたしんちの台所で、フライパンをコンロからお

ろしながら。

「あ、あははは。ごめんごめん。とりあえず、お皿洗っとくね」

洗っとく、っていつか、ふいとく、っていつか。戸だなの中にあるお皿って、みんなホコリまみれだもんね。

「　なあ、何度も聞くけど、ほんまにこんなんでええんか？」

後ろから、ホントに困った声が聞こえてきた。

「誕生日やんか？　いつから急にこっち来たからって、プレゼントがわりに料理っちゅうのも　」

心配性だなあ、あいちゃんも。「これで5回目だよ。いいに決まってんじゃない。あたしが好きなんだから」

あ、赤くなってる。くふふふ。

「よ、よお言うわ。あたしが味付けするよ、すっく

『すすい、すすい』てグチくれよるくせ」

あはは。コンロの方むいちゃった。

「まあそう言わずにさ。今日はあいちゃんの料理、食

べたいんだよ」

ホント、おいしいもんね。どれ、ひとつ、っと。

「ま、まあ、そうまで言われたら悪い気せえへんけど あ、こらー！ つまみ食いするんやない!!」

あてて。手たたかれちゃった。

「ったく さあて、あと何作つたらかなあ。ええ粉あるし、タコあったら焼いたるんやけど」

うん。ほんとはその方がいいんだけど、でも。

「たこ焼きは、目の前で焼かないと、ね」

「ああ、まあそやな」

またコンロに向き直っちゃったあいちゃんの背中、

あたしはなんとなく見つめてた。

ちよつと、おつきくなつたかな？

\*\*\*\*\*

もうキ口も揚げたかな、ちゅうくらいのとり肉  
さめてもええように塩多目に振って と。ふう。こ

れで揚げもん、ひと段落や。

まあ、こんだけでも、パーティーはできるやるけど  
にしても。

「しつかしなあ。あたしが来なかったら、料理どなに  
いするつもりやったん？」

使い慣れてへんコシヨウ挽き回しながら、ちろつ  
と後ろ見たつた。どれみちゃん、舌出して頭かいて  
るわ。

「お母さん、急に出かけることになっちゃったんだよ。  
お父さんも、ぼつぷもね。あたしだけ居残りだよ」

へ？ なんやそれは。

あたしが思わず振り返つたら、どれみちゃん、両  
手の人さし指目の前でこねくりながら、

「商店街のくじで当たったんだってさ。よりによって、  
今日から3日間だけ有効の温泉ご招待券」

ああ、そついつことかいな。

「みんな呼んじやつたし、あたし抜きでパーティーで  
きないじゃん」

5 きれるのどっち？

「どうりで、あたしが来たとき、いきなり抱きついてきたはずや。」

「そっか。今日はだれもおれへんのかあ。」

「あたしが泊まれたらえんやけど、学校の行事やからなあ。夕方には旅館行かならんし。」

「だから いけないこと、する？」

パソコン！

「いったい！ おたまでぶたないでよ!!」

「つたく。そら先週のドラマで、おんぶちゃん言うてたセリフやないか。」

「マジな声でアホなことぬかすからや。そあいうセリフは、おんぶちゃんやないと似合わへんで。」

「ひ、ひどいわ！ わたし、なにもかも捧げ。」

ひと呼吸して、と。

「さあて、次は熱つついのいったるかなあ。」

「あたしが目の前にフライパン掲げたら、どれみちゃ

ん飛びのいてった。」

「うわあ！」「ごめ〜ん。反省しまあす。」

「笑いながら、両手合わせてるわ。まあ、気にするな、うちゆうことやな。」

「よっしゃ。あたしは、あたしにできること、ちゃんとやったるわ。」

\*\*\*\*\*

「そつえば、どれみちゃん？」

「台所のテーブルの上が料理でいっぱいになったころ、あいちゃんが言った。」

「あたしは、とっさに口の中の中から揚げ飲み込んで

ああ、あいちゃんが困った顔して頭かいてるよ。」

「ごめ〜ん。」

「ま、そらええとして ケーキがないみたいなん

やけど？」

「え？ あ、そっか。」

「それがさ　ももちゃんを送ってくれる、って言うてたから、用意しなかったんだよ。でも、まだ届かなくってさ」

思わず苦笑いになっちゃった。アメリカからだから、遅れてもしかたないよね。

あれ、あいちゃん冷蔵庫の中ゴソゴソやってる。

あ、そっか。

「クリームもないんだよ。実は」

冷蔵庫閉めて立ち上がったあいちゃん、すっごく困った顔してた。

「あっちゃあ。クリームなしやと、まともなケーキ作れへんわ」

そだね。今から買いに行っても、あいちゃん帰るまでに間に合わないし。

「ま、いいよ。誰か持ってくるかもしれないしさ」

あたしはなんとか笑ってみただけ、あいちゃん困った顔のままだよ。

「ごめんなあ。ももちゃんやったら、なんとかでき

るんやろうけど」

「いいって」

「せやけどなあ、あの白いんがないと、どうも誕生日日っちゅう感じがせえへんし」

ああ、考えこんじゃったよ。あいちゃんのせいじゃないし、別にいいのに　ん〜と、そうだなあ。

「あたしはどっちかっていうと、ケーキよりステーキが欲しかったかな〜」

あははは、って笑って言ってみた。

「ん？ さっき見たら、冷蔵庫に肉あったやん」

ああ、よかった。普通の顔に戻ったよ。

「誕生日できないかわり、って買ってくれたんだけど、なんか、安う〜い肉らしくてさ。スジだらけで、ステーキには使えないんだって」

「ふうん。そやったら、料理はしてええんやな？」

あいちゃん、『白いもん』とかぶつぶつ言ってる。なんだかわかんないけど、料理だったらおまかせだよ。

7 きれるのどっち？

「うん。いいよ。あいちゃんの好きにして」

「そやったら　なあ、彫刻刀持ってへん？　もう

使ってへんのがええんやけど」

彫刻刀？　なんに使っただろ??

\*\*\*\*\*

プチッ、プチッ、プチッ

あいちゃんの手元、さつきから、なんかへんな音  
してる。なんだろな〜ってのぞこうとすると、隠し  
ちやうんだもん。なにやってんだろ？

「しつかし、どれみちゃんもあわからんなあ」

「へ？」

いきなり言われたんで、声が裏返っちゃったよ。

「ももちゃん並みうちゅうわけやないけど、お菓子  
けっこうやってたやんか？」

「うん。で？」

「それやのに、なんで料理が上手うまならんのかなあ、思  
てな」

普通の声でさらっと言われると、余計ぐさっとく  
るなあ。もう。

「ぶう。ほつといてよ」

「や、ほつとくんはええけど。どれみちゃん、惚れっ  
ぼいし、惚れるといっしょけんめいやるんに、なん  
でやるかな〜思て」

「だから！　こうやって、あいちゃん見てるんじゃん」

「見てても上達せえへんで〜。手え動かさな」

そう言うてから、しばらくプチプチやってたけど、  
またぼそつと聞こえてきた。

「　やっぱ、だれかに惚れてるときやないと、上  
手くならへんのやるかなあ？」

もう！　そこまで言わなくてもいいじゃんか!!

「そ〜ゆ〜こと言うんだったら見てなよ。いま作っ  
たげるから！」

\*\*\*\*\*

「ふ〜んだ。あたしだって、カレーくらいは作れるんだから。」

「にんじん切って あ、あれ？なんか、転がっちゃうな。 いや、ハサミつかっちゃお。おとうさん言ってたもんね。 キャンプじゃ、ハサミでなんでもやっちゃうんだ、って。」

「ハサミい!? なにアホやってんねん。料理やつたらその包丁で、ちやつちやとやつたり」

「べ〜だ。 あいちゃんも、彫刻刀なんてヘンなもの使ってるじゃん。ハサミだって、ちゃんと料理できるんだもんね〜だ。」

「ほら、こうやって。 にんじんでしょ、じゃがいもでしょ、とり肉だって あいたっ！」

「いたっ、いたたたっ!!」

「あほおー!!」

切った指の先、あいちゃんの両手がかぶさった。

「いたいつ、いたいよあいちゃん!!」

「そのまま、押しつぶすみたいに あ〜っ!!」

「ええから黙るときっ!!」

「痛い!痛い!痛い! 指つぶれるう〜っ!!」

\*\*\*\*\*

「あいちゃんの手が、そおつとどいた。」

「ふう。 なんとか、血い止まったみたいやな。 そやけど」

「こつち向いたあいちゃん、目がこわい。」

「こツツの どあほう!!」

「そんな言わないでよお。 ごめん、ごめんってば」

「あいちゃん、血がしみ出してる指に、おっきなバンソコ貼ってくれて。それからため息ついた。」

「まだ、怒ってるね。」

「ハサミつちゆうんはな、きれいに切れへんねや」

え？



9 きれるのどっち？

「包丁やったら、スパッときれいに切れるわ。そやから、くつつけたらすぐ治るんや。けど、ハサミはそついかへん。へタすると、もう縫うしかあらへんねや」

そっか。あいちゃん、いじわる言ってたんじゃないんだ。あたしがあぶないから止めてたんだね。

だめだなあ。たった半年離れてただけだってのに。あたしもどあほうや。変なこと言つて、ごめんなあ」  
あいちゃんが、ケガしたあたしの手、両手でにぎつた。すっごくやわらかい手。さっき、つぶされそうに思ったのがうそみたいだよ。

「どれみちゃんはな、なんでもできるねん。あたしなんかよりずっと、ずくとや。ほんまやで？」

せやから、料理も覚えてほしいねん。ちゃんとな」

\*\*\*\*\*

パーティーの会場は、うちのリビング。

痛い指かばいながら、料理をテーブルにのせてつて。ちよつと頭上げたら、目の前であいちゃんが止まっていた。

「ひの、ふの ん、8つがええとこかあ」

え？なんのこと？

「取り皿いくつ乗つかるかな？思てな。せやけど、こんな少なくてええの？」

ああ、そういうことが。

「まあね。ももちゃんいないし、あいちゃんも来ないと思つてたし、はづきちゃんとおんぷちゃんは遅くなるつて言つてたしさ」

それで矢田くんが代わりに来る、つていうのが、あのふたりらしいけどな。

「中学の友だちは？ 呼ばんの？」

「まあ 狭いもんね」

あれれ、あいちゃんいきなり、くすくす、つて、笑いだしちゃった。

なんだろう、つてあたしが目を見たら、

「ん？ ああ。MAHO堂使<sup>2</sup>たら、おおせい呼べるんになあ。どれみちゃんも、やつぱ使わんのやなあ、思てな」

あたし『も』か。そだね。

「そりゃあ ねえ？」

あたしはポケットに手をつ突っ込んで、指にあつた硬いものにぎった。

あいちゃんも、ジーンズのポケットからひょいっ、と取り出した。

おんなじ、金色のカギ。

「ゆき先生からカギもらつたの、あたしたち5人だけだもんね。ぼつぷだつて持つてないんだから」

他の人は、入れたくないよ。友だちでもさ」

「そか」

「はづきちゃんも、矢田くん入れたことないみたいだしね。きつと、みんなおんなじだよ」

カギをポケットにしまつてたら、あいちゃん的笑

い声が出た。くすくすつて。

「どれみちゃん。はづきちゃんが矢田くんに話したかて、『裏切りもの』なんて言つたらあかんで？」

うん。あいちゃんの顔みながら、あたしはうなずいた。そうだね。言いたくなつちゃうかもしれなけれど、ね。

「まだ早いかもしれへんけど、ふたりきりになりたいくつちゆうこともあるやろしな」

ふたりきり、かあ。はづきちゃんたちの、ふたりきり、ねえ。

「そのときは」

「そんなときは？」

「裏からのぞくっ！」

シャツッ!!

あたたたたっ！

「ツたあく！ そんなやつたら、あたしがこつちで監視せなあかんじゃないか」

11 きれいのどっち?

もおう、痛つたいなあ。泡だて器なんてどこに持ってたんだよあー!

「それに、はづきちゃんだけやないで?」

どれみちゃんかて、いつそうなるやわからへんわ」

言われた瞬間、目の前に浮かんできちゃった。

MAHO堂の中で抱き合つてると」。あたしと

うああああっ!

「え? あ、いや、ん? え!」

あゝ、顔が熱くなつてる。言葉がでてこないよ。

ああ、あいちゃん歯で笑つてるし。

「よう言うやろ? 人の恋路を邪魔するヤツは

つてな?」

う。遊ばれてるなあ、あたし。

料理を並べなおしながら熱くなった顔さましてた

ら、あいちゃんの笑い声がやんだ。あれっ、と思つ

て振り返つたら、あいちゃん、テーブルの向こう側

見てるよ。

「MAHO堂は、大切な思い出の場所やけど せ

やけど、ほんまの思い出は、あそこにあるんやない。

あたしはそう思つわ」

ぽつん、って話してるあいちゃんの顔見上げて、あ

たしは思った。

やっぱり、おつきなつてるんだなあ、って。

\*\*\*\*\*

ぼーん、ぼーん

時計の音で、いっしょに振り向いた。ああ、もう

4時かあ。

「ほな、そろそろやな」

あいちゃんが、頭のナプキンとエプロンとって、台

所のイスにかけてる。

「せめて、あと一時間いてくれたらな せつかく

来たのに、あたしとしか会えないんじゃないさ」

あと、しばらく言葉にならなかつた。

「まあ、みんなに会える時間ないんは、わかつた

「ことやからな」

うん　しかたないのはわかってるんだ。けど、ね。ちよっと沈んでたら、肩にぼんぼんって当たった。

「ま、3ヶ月ちよいたったら、会いに来たってや」  
3ヶ月？　ああ、あいちゃんの誕生日か。

あたしは、思いつきりつなずいた。がんばって、お小遣いためなきや。

おつきなバッグ持って、あいちゃんが玄関出た。あたしはあとから　ぶっ！

「ああ、あかん。言い忘れてたわ」

いきなり立ち止まわないでよ。背中にぶつかっちゃったじゃん。

「まだ焼いてるんがひとつ、オープンにあるんや。悪いけど、パーティの最後あたりで出しといてくれへん？」

え？　ああ、そういえば　そっか、あたしがケガしちゃったから、間に合わなかったんだ。

「白くて丸いし、ろくそく立てれるようにしたから。ほな、またな！」

最後まで、あいちゃんらしいや。よあっし！  
「そんじゃ、3ヶ月後にね！」

\*\*\*\*\*

5時すぎ、来てくれたみんなからプレゼントもらっ

てから、あたしはいい気分で料理取り分けた。

今日は、もひとつ楽しみがあるんだよね。

「わ、すつごくおいしい」

「うめえじゃん、これ」

「これ、みんなどれみちゃんが作ったの？」

「そんなわけないじゃん」

さあつて、誰が最初にわかるかな？

「妹尾、来てたのか」

おお。矢田くん、鋭い。

「だから、その程度で済んだのか」

13 きれるのどっち？

「って、目線があたしの手に みんなじゅっと見て、あゝあ。爆笑されちゃった。もう ま、いいか。」

「あら？ ケーキはないんですの？」

あ、そうだった。

「あいちゃんから言われてたんだよ。白くて丸いの焼いてるから、出しといて、って。いま持ってくるね」  
「あたしは両手に手袋はめて、オープンに向かった」

オープンから出してきたもの、テーブルの上に置いたら、周りがしーんとなった。

「白くて、丸い、ね」

うん。

「でも ざらざら、だよ」

うん。

「なんか、しょっぱいぜ？」

うん

「おまえ、妹尾に嫌われてんじゃねえの？」  
ん？

「いつてえ〜！なんで俺だけ殴るんだよ！」  
うっさいな、小竹は。

「ああ、みんな心配そうな顔してるよ。しょうがないなあ ふう。」

「まあ、あいちゃんにだって失敗はある、ってことだよ。ほら、ろくそく立てるところもあるし、食べられないけど、ケーキ代わりに使っちゃおう。」

それから1時間くらい、みんなと話して、ゲームして みんなを見送ったときには、もう7時近くになっていた。

でも、その間に話したんだか、あたしぜんぜん覚えてないや。

\*\*\*\*\*

「おまたせ もう、終わっちゃったわよ、ね」  
みんなが出てったあと、リビングでぼーっとして

たら、開いたドアからびよこつ、と髪の毛が出てきた。あ、おんぶちゃんだ。

「ごめんなさい。遅くなつちやつて後ろからはづきちゃんも顔だした。」

おめでとう、つて言葉といっしょに、ふたつのプレゼントが目の前に出てきた。

うん。せつかく来てくれたんだもん。いつまでもぼーっとしてちゃだめだよ。

「まだ料理もあるよ。食べて食べて♡」  
ふたりをテーブルに連れてつて、新しい取り皿あげて。もっかい、笑顔になつてみよう。うん。

「そう？じゃ、いただくわね」

ふたりとも、残つたから揚げぱくつ、と口に入れて。あはは。おんぶちゃんつたら、もくもくと食べてるよ。

「どっつ？」

「どれみちゃん、ずるい！来るなんて、わたし聞いてないわよ!!」

えーと、そんなこと言われたって

「学校の行事で、急に来ることになったんだって。あたしも知らなかったんだよ。もう、旅館に行っちゃったけど」

おんぶちゃん、まだぶつぶつ言ってるよ。あとで電話で文句言いそうだなあ。あたし知〜らない。

「あら？これ」

はづきちゃんは、あの白くて丸いかたまり、じつと見てる。ああ、また説明しなくちゃいけないのかあ。

「それ、あいちゃんの失敗作。だーれもケーキ持つてきてくれないから、あいちゃんにはちよつと期待したんだけどな」

やだなあ。はづきちゃんだけじゃなくて、おんぶちゃんもじつと見てるよ。

「ケーキじゃないわね」

うう。あらためて言われるとつらいなあ。

「お肉買ってもらうても、結局ステーキ食べれなかつた」

たし。やっぱりあたし、今年も不幸なのかなあ」

えへへ、って笑いながら言ったら、ふたりが顔みあわせた。ん？

「どれみちゃん、ひよっとして安いお肉だからステーキにできない、とか、あいちゃんに言ってるの？」

「う、うん。なんでわかるの??」

あれれ？ふたりして笑ってる？

「ふふ。じゃ、これがあいちゃんのプレゼントね」

おんぷちゃんがそう言っつて、白いかたまりを台所持って行った。

「まな板の上に乗せて、と どれみちゃん、木づちない？」

木づち？ っつて、木のトンカチだよな。そういえば、さつきあいちゃんが使ってたな。

「あ、それそれ。じゃ、いくわよ。よいっ、しょ！」  
ゴンツ！

白くて丸いかたまりに、ひびがはいった。

コン、コンコン

ひびが、だんだん大きくなって あれれ？中に、なにかあんの？

「もう、いいかな？」

白いかけらをはがしてたら、中に黒っぽいものが見えた。 っつて、これ！

「ステーキ!?!」

あみ目もよりの焦げ目がついた、厚切りのステーキが何枚も！で、でも。

「ステーキ用の肉なんて、なかったはずだよ!?!」

あ、またふたりして笑ってる。もう！

「いいから、食べてみて」

なんか、納得いかないなあ ま、いつか。ぱくつ、

と。うん！

「ああ、本物のステーキだあ♡」

「あいちゃんらしいわね。焦げ目つけてから、お塩

で固めて蒸し焼きにしたのよ。それに、ほら」

おんぶちゃんが指さしたとこ、三日月のへこみがある。

「スジみんな切って、ね」

ってことは、これって

「あのスジだらけの肉っ!?!」

うそだよ、信じらんない。いつくらあいちゃんだつて、こんな

「すごいわ。ほとんどスジ感じないもの。でも、どうやったのかしら? 包丁じゃないみたい」

はつきちゃんに言われて、あっ、と思った。

そっか。彫刻刀に木づちって、これだったんだ。

「でも、全部は間に合わなかったみたいね。これスジ残って あ」

あたしは、おんぶちゃんがつついてた肉つかまえて、丸ごと口に入れた。

「どれみちゃん、ちよっと、それ」

口の中で、ごりっ、ごりっ、ってかみ切れないスジ。

こんな固いスジ、ぜんぶ切ったんだ。ひとつひとつ見つけて、プチップチッ、って。

あたしの背中、ふたりが両側から抱きかかえてくれた。そうだね。いつだって大親友だもん。ごめんね、あいちゃん。

そのあいちゃんが、言ってくれたんだ。あたしだつてうまくなれるって。

よおし、あいちゃんの誕生日には、料理作りにいつちやおう。きつとあいちゃん、驚かせちゃうから!

「ところでどれみちゃん、にんじんの切りくずいっぱいあるけど、なんなの?」

ら、来年の誕生日には、きつと

「にんじんだけじゃないわ。じゃがいもに、お肉そっか、飼育係になったのよね?」

その前に、包丁の練習しよ。うん。

— おしまい —



## あとがき

「あの猪ししは仲人なこうど入れた仲でっかいな？それともどれあい  
でっかいな??」

「猪に仲人もどれあいもあるかいッ！」

上方落語『池田の猪買ししがい』より

というわけで。高校時代に落研に居たせいか、どうも「どれあい」と聞くとこの落語を思い出してしまいます。

ちなみにこの「どれあい」という言葉。漢字では「邪合」と書きまして、元々は「性的な関係をきっかけに付き合いはじめること」を意味していたりします。 さっさと各壺のコメントに行きましようか(^\_^;)

- 『きれなのどっち?』
  - 卒業後のどれみっち誕生日壺。そこまであいこっち出したいんかい！と言われましたが まあ、好きなので(^\_^;)
  - はさみで料理作るのも、指カットしちゃうのも実体験だったりします。どれみっちは皮ちよいと切ただけですが、深く切ると本当に完全には元に戻りません。あまり台所に立たない方は注意してくださいね。
- 『ちっちゃなかくれんぼ』
  - こちら卒業後初めての、あいこっち誕生日壺。私が書くと、いつも活躍してくれるちいさなキャラがいます。あいちゃんと一緒にいるとこ見ると、ほっとするのですよ。

では最後に、この本を手てにされた(手にしてしまった方も含めて) すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

## 奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 2003年11月30日